

令和八年度

岡山白陵中学校入学試験問題
(二期)

国語

受験番号	
------	--

注意

- 一、時間は五〇分で一〇〇点満点です。
- 二、問題用紙と解答用紙の両方に受験番号を記入しなさい。
- 三、開始の合図があつたら、まず問題が一ページから一九ページまで順になつているかどうかを確かめなさい。
- 四、解答は解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 五、字数制限のあるものについては、句読点も一字に教えます。

— 1 —
次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑩の文中にある——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 日本でコクホウに指定されている城は、姫路城、彦根城、犬山城、松本城、松江城の五城である。
- ② アメリカのトランプ政権は、日本に対して十五パーセントの追加関税をかけた。
- ③ 彼女は三年前から、ゴシン術として合気道と柔道を習っている。
- ④ プロジェクトを成功に導くために、担当者とメンミツな打ち合わせをする。
- ⑤ 難しい技を習得しようと思ったら、一心フランに毎日稽古をするしかない。
- ⑥ 彼は、江戸時代から続くうなぎ屋をイトナむ老舗の十代目である。
- ⑦ プラネタリウムを鑑賞しながら、宇宙のムゲンの広がりに思いを馳せる。
- ⑧ 一刻も早いロシアとウクライナとのテイセンを願う。
- ⑨ 明治時代にはヨウサン業が栄え、生糸は日本最大の輸出品となった。
- ⑩ 大阪で五十五年ぶりに万国ハ克蘭会が開催され、大きな話題となった。

問2 次の①～④はある慣用句を用いた文です。()で示した慣用句の意味の説明を参考にして、①～④の [] に入る言葉を後の【選択肢】ア～クの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 近所の小学生の落書きが、目に []。(見ていられないほどひどい)
- ② あの大臣は、大事な場面でいつも言葉を []。(都合が悪いことをごまかして言う)
- ③ 尊敬する先輩のアドバイスを肝に []。(心にきざみつけて忘れない)
- ④ 今あの会社に投資するのは、火中の栗を [] ようなものだ。(他者の利益のために危険を引き受ける)

【選択肢】

- ア 濁す イ 尽くす ウ 届く エ 剥く オ 拾う カ 銘じる キ 余る ク 染みる

問3 次の五つのことわざの [] には、いずれも動物の名称が入ります。()で示したことわざの意味の説明を参考にして、 [] に入る言葉を五十音の早い順に並べた時、四番目にくる言葉をひらがなで答えなさい。

[] の一声 (議論がまとまらない状況で、力のある人の一言で物事が決まること)

張り子の [] (外見は強そうだが実は弱いもの)

[] の甲より年の功 (長年積んだ経験の価値は何よりも尊いということ)

泣きっ面に [] (不幸な上に、さらにつらいことが加わること)

能ある [] は爪を隠す (本当に実力のある者はみだりにそれをひけらかさないこと)

二
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の桐乃^{きりの}は、母と父との三人で古い団地で暮らしている。その団地には、様々な国にルーツを持つ人々が生活しており、桐乃のクラスにもその子供たちがいる。クラスでは彼ら^{かれ}を巻き込んでの衝突^{しょうとつ}が絶えず、ベトナム人のクラスメート・ヒュウはいじめの標的になっていた。桐乃の母は、団地に住む人々を国籍^{こくせき}問わず日夜助けており、桐乃は自分より彼らが優先^{せんげん}されているように感じている。この日、母親は桐乃の知らない間にヒュウを自宅に招いてカレーを食べさせ、桐乃はそれに腹を立てている。

「だから、なんでそれが私のお母さんなのか、私にはまったくわからないの」

自分の言葉が母をひどく傷つけていることがわかる。けれど、桐乃の口からは言葉が止まらない。

「私にはよくわからないけれど、お母さんがやっていることは、お母さんがしなくてもいいことなんじゃないの？」

そういうのは、町の福祉課^{ふくし}とか、政治家とか、篤志家^{とくし}？ お金と時間に余裕^{よゆう}がある人がやることなんじゃないの？」

「それを待っていたら……」

そこまで言って母は口を噤^{つぶ}む。今日の母は、いつもの母じゃない。何かを隠^{かく}している気配がある。自分には言えない何かを、母は心の内側に隠している。

「私はこんな古い団地から早く出たい。日本人しかいない町で暮らしたい。お母さんみたいに外国の人とかかわって生きていきたいくない」

今、父がここにいれば、「ごめんなあ、父さんの稼ぎが悪くて」と笑い話にしてくれるのに。

父がいない今、①桐乃の言葉は笑いにも昇華^{しょうか}されず、空中に留^{とど}まったままだ。母は何かを言いたくて、でもそれを隠した顔をして、俯^{うつむ}いて立っている。自分がひどいいじわるをしているようで気分が悪い。

「ごちそうさま」

「もういいの？ まだ食べ終わってないでしょう？」

「お父さんが帰ってきたら、いっしょに食べる」

そうやって桐乃は自分の部屋のドアを乱暴に閉めた。

もし、友だち、とか、親友みたいな存在がいたら、今の自分の気持ちを共有してくれるのかな、と桐乃は思う。クラスでも部活でも、桐乃は相変わらず無視される状態が続いている。

とっでもしんどいんだよ。誰かにこの気持ちを伝えなかったが、思い浮かぶ相手がない。

立ち上がり、窓を力をこめて開ける。どこからか低く音楽が鳴っているような気がするが、時間が早いからどこか別の部屋かもしれない。児童公園でたむろしているあの子たちのことなんか、ちっともうらやましくはないけれど、それでも、あの子たちには仲間がいるんだよな。そう思ったら、自分がどこか人間として劣っているように思えてしまう。

② 心を切り替える。

高校に入ったら、と桐乃は思う。同級生たちが誰も入れないような高校に私が受かったとしたら、そこで素敵な友だちを作ろう、そう心に決める。日本人で頭がよくて、素敵な友だち。その顔を思い浮かべようとしたが、同級生の顔が幾人か浮かんだだけで、うまくはいかない。

だけど、と思う。この団地を抜け出すには、とにかく勉強するしかないんだ、と桐乃は改めて自分の心に誓う。自分の机に座り教科書を広げる。「ガリ勉」なんて言われてもかまうもんか。勉強はこの場所から遠くへ行くための足がかりなんだ。母にほめられなくても、もういい。自分が満足できればいい。そう思いながら、桐乃はひとつひとつ、英単語を頭に詰め込んでいく。

「今日は珍しく来たんだ」と桐乃は思う。

翌日、学校に行くと、ヒユウが斜め前の席に座っている。

もう半袖のシャツを着ている生徒も多いのに、ヒユウは相変わらず、長袖のシャツのままだ。袖を乱暴に折り返しているから、肘のあたりに不格好に布がかたまっている。髪も相変わらず伸びっぱなしで、肩のあたりで乱雑に切られている。もしかしたら自分で切っているのかもしれない。

① クインがヒユウのそばに近づいて、ベトナム語で何か言っている。クインは笑顔で一生懸命話しかけるが、ヒユウがほとんど反応しないので、あきらめたように自分の席に戻ってしまった。

ホームルームが始まり、横川先生がヒユウのほうを見て、ゆっくりと語りかけるように話す。先生はヒユウが学校にやって来て、どこかほっとしているように見える。

慌ただしくホームルームは終わり、ヒユウがノートを抱えて、国際教室に移動しようと立ち上がり歩き出す。そのとき、ケヴェンがわざと足を出して、ヒユウが思い切り派手に倒れた。突然の物音に皆がヒユウを見る。転んだときにぶつけたのか、肘のあたりが切れて血が滲んでいる。クインがすかさず、ヒユウに近づく。

「保健室に行かなくちゃ」

その声もヒユウは無視する。

自分と同じだ、と桐乃は思う。もう学校の、クラスの誰とも深く心を通わせることを放棄したんだろう。傷なんてどこにもない、という顔をしてヒユウが立ち上がる。床に落ちたノートをなぜだかケヴェンが手にしている。ノートを広げて、ケヴェンが下品に笑う。

「花、花、花、草、草、雨、雨って小学生かよ」

そのノートをすかさずクインが奪い取る。

「おまえ、ヒユウのことが好きだろ？」

小柄なクインを見下ろして、ケヴェンがあざ笑うように言う。クインはケヴェンの言うことを無視して、そのノートをヒユウに渡した。③ それなのに、ヒユウはお礼を言うこともなく、教室の外に出て行ってしまった。

クインが顔を赤くしているのを見て、ケヴェンが満足そうな笑みを浮かべる。

「ベトナム人はベトナム人が好きかあ」

ケヴェンはそう大声で言い、隣にいる気弱そうな日本人生徒の背中をわざとらしく叩く。うんざりだな、と桐乃は思う。ケヴェンはこちらん、ケヴェンに刃向かっていかなないヒユウも、X 感丸出しのクインも、それを遠巻きに見ているたっくさんの日本人生徒も、そして、自分も、何もかも嫌だ。嫌だ、という方向に感情が振れるのにも嫌悪感がある。

中学卒業まであと一年九カ月、耐えなくちゃと桐乃は思う。一年九カ月耐えれば、高校で自由な学校生活が待っている、はずなんだ。自分には明確なゴールがある。多分、クインにもあるだろう。そこまで考えてふと思う。ヒュウには目指しているゴールなんてあるのかな、なんて。

休み時間に話すような友だちもいないので、この前、図書館で借りてきた日本の歴史の本を読んだ。本の最後は日本が戦争で負けたところで終わっている。桐乃が生まれるずっとずっと前の話だ。この国が戦争をしていて空から爆弾が落ちて来たときがあったなんて、まるで想像がつかない。ベトナム戦争、って言葉がふいに頭に浮かぶ。ベトナムも戦争をしていたんだ、と思う。どこと戦争をしていたのかも、どんな戦争だったのかも桐乃は知らない。でも、今は、ほんの少しだけ、それを知りたい自分がある。そんなことどうでもいいし、知りたくもない、と思っていたのに、そんな興味が自分のなかに湧き出てきたことに桐乃は驚いた。本を読み進めるたび、桐乃の頭にいくつもの疑問が浮かぶが、その答えは母に聞けばすぐにわかるような気がした。けれど、母に聞くつもりはなかった。図書館で司書さんに、そういうことを書いた本がないか尋ねてみよう、④ そう思いながら、桐乃はそつと本を閉じた。

給食の時間は自由に机を近づけて、誰とでもいっしょに食べていいことになっている。教室にいくつもの小さな島ができる。一人なのは桐乃か、ヒュウくらいのものであった。桐乃は給食のトレイの横に、本を広げて、本が汚れないように気をつけながら、給食を食べ始める。

「私の推しがさあ」

「英語の宿題やってきた？ 見せてよー」

「そのオレンジ、食わないならくれよ」

教室のざわめきを聞いていると寂しいな、と正直思う。この間までは桐乃を誘って一緒に給食を食べてくれる友だちもいた。けれど、あの目を境に、誰からも誘われなくなった。自分がキレたんだから仕方がない。そう思いながら、桐乃は野菜のかけらが入ったスープを口に運ぶ。

ガタンと音がして、ヒュウが立ち上がった。皆がなんとなくヒュウに目をやる。ヒュウが教室を出て行く。「ちよつと、ちよつとどこ行くのー？」

クインの声もヒュウは無視したままだ。

昨日、自分の家で、ドア一枚隔てた居間でカレーライスを食べたであろうヒユウの姿を桐乃は想像する。桐乃自身は、あのあと、帰ってきた父といっしょに食事をし、カレーを三杯お代わりした。カレー一杯でヒユウのおなが膨れたとは思えない。今日だってそうだ。男子は大抵、給食をお代わりする。昼抜きで、自分と同じ年齢の男子が耐えられるはずがない。

いつか、ヒユウの家に行った日、持っていったプリント。本当は見てもいいしなかったけれど、給食費の支払いに関する内容だった。桐乃の頭のなかで次々疑問が浮かぶ。ヒユウのお母さんは、あれをちゃんと読んだんだろうか。ヒユウだけがあのプリントを読んだんじゃないだろうか。だから、ヒユウは給食を食べないんじゃないだろうか。横川先生はこのことを知っているんだろうか。それでも、桐乃は自分から動くつもりはなかった。また余計なことをした、と自分が後悔するだけだ。

ヒユウは昼休みをどこで過ごしたのか、それでも午後の授業が始まる頃には教室に帰って来て、自分の席に座った。授業中、ヒユウのおなかの鳴る音が桐乃の席まで聞こえてきた。ケヴェンが、いつか桐乃にやったように、ヒユウのおなが鳴るたびに、ノートの切れ端を丸めたものをヒユウにぶつける。けれど、ヒユウはそんなことは起こっていない、というくらい無視を決め込んで、黒板を見つめている。

ノートは開かれていても、ヒユウが黒板の文字を書き写している様子もない。何をしに学校に来てるのかな、と桐乃は思う。横川先生に言われたから？　そこまで考えて桐乃は頭を振る。

ヒユウのことなんて、もう自分には関係ない。お母さんと私は違う人間。ヒユウにどんな事情があるのかなんて、私は知りたくないし、もし知ったとしても私にできることなんてない。ほかのクラスメートと同様、自分には関係のない人間なんだ、と思い直す。

それなのに、⑥ ヒユウのおなかの音が響くたび、責められているように感じるこの感情はなんなんだ、と桐乃は思う。

(窪美澄『給水塔から見た虹』による)

(注1) 桐乃は相変わらず無視される状態が続いている——桐乃は、授業中にいやがらせをしてくるケヴェンに大声でどなり、クラスメートから冷ややかな目で見られ、その後、桐乃は距離きよりをおかれ誰からも話しかけられなくなっている。

(注2) 児童公園でたむろしているあの子たち——団地の敷地しきちない内にある「児童公園」に群れ集まっている外国にルーツのある子供たち。

(注3) クイン——桐乃のクラスメートで、ベトナム人の女の子。勉強がよくできて、日本語も不自由なく話すことができる。

(注4) 横川先生——桐乃のクラスの担任教師。

(注5) 国際教室——日本語があまり得意でない、外国人の子供たちのための補習クラス。

(注6) ケヴェン——桐乃のクラスメートで、ブラジル人の男の子。日本語は不自由なく話すことができるが、乱暴者でクラスメートをからかったり喧嘩けんかをしたりする。

問1

——線部①「桐乃の言葉は笑いにも昇華されず、空中に留まったままだ」とありますが、どういふことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 桐乃が母親に対して不満をぶつけたところ、唯一の理解者である父親が、桐乃の思いを笑い話に変えて母親に伝えてくれることもなく、とげとげしい雰囲気だけが続いているということ。

イ 桐乃が母親に対して不満をぶつけたところ、いつも笑い話に変えて優しく叱ってくれる父が不在だったために、母親から厳しく責められているようなつらい感じが続いているということ。

ウ 桐乃は母親に対して不満をぶつけたが、母親からの応答はなく、父親が笑い話に変えて緊張を和らげることもなく、重苦しい雰囲気だけが続いているということ。

エ 桐乃は母親に対して不満をぶつけたが、父親の機転で笑い話に変えられなかったため、母親をこれ以上傷つけまいと自分の思いを抑えこむ苦しい時間が続いているということ。

問2

——線部②「心を切り替える」とありますが、「切り替える」前の桐乃の気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 母親を深く傷つける言葉を浴びせてしまったことへの後悔に、外国人に対する先入観から彼らを見下していた自分への嫌悪感や自責の思いが加わり、それらが入り混じった非常につらい気持ち。

イ 母親へのいら立ちとそれをぶつけてしまったことへの気分の悪さに、その気持ちを共有してくれる友だちがいなかったために感じた孤独感や劣等感が加わり、それらが入り混じった非常に苦しい気持ち。

ウ 隠しごとをしている母親への不信感と古い団地生活への嫌悪感に、その気持ちに共感してくれていた仲間から無視されたことによる孤独感や悔しさが加わり、それらが入り混じった非常に苦しい気持ち。

エ 母親に対する強い怒りとそれをさらけ出したことへの気恥ずかしさに、その気持ちを理解してくれる友人がいらない劣等感と勉強がはかどらないことへの焦りが加わり、それらが入り混じった非常につらい気持ち。

問6 線部⑤「ヒュウのおなかの音が響くたび、責められているように感じるこの感情はなんなんだ、と桐乃は思う」とありますが、ここでの桐乃の心情を五十字以内で説明しなさい。

問7 本文の表現や内容に関する説明として適当でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ドアを乱暴に閉めた」や「窓を力を込めて開ける」といった桐乃の行動の描写には、桐乃のいら立ちや抑えきれない感情が表されている。

イ ヒュウが実際に発言する描写はないが、「突然の物音に皆がヒュウを見る」「ガタンと音がして……目をやる」などと音によってクラスメートにその存在を感じさせるよう描かれている。

ウ 「教室にいくつもの小さな島ができる」という描写は、「仲間同士のつながり」が「島」として桐乃の眼前に現れ、そこに入りづらい状況を示しており、彼女の孤独を強調する効果がある。

エ 桐乃とクイン、ケヴェンのそれぞれの心情について具体的に描写されているため、一人一人が抱える思春期の心の問題をはっきりと読み取ることができる。

このページに問題はありません。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人が感じるさまざまな感覚や、心に抱くいろいろな感情のうち、「甘い」や「苦い」、「痛い」「寒い」「怖い」は生存のために直接的に有益な感覚として備わったものです。そこから一歩進んで、「おいしい」や「まずい」、「怖い」「安心だ」などができあがります。いずれも、もともとは危険を避けたり、安全性を高めるためには有益な感覚や感情です。

「美しい」も本来は、相手が人であれば、性選択に際して種の保存の確率を高めることを目的としてできた感情のはずです。そして相手が人でないものであっても、先に見たように、もともとはやはり生存に有益なものや状況に由来していたのでしよう。

①「美しい」の仲間の感情も同様です。たとえば「可愛い」は、本来は小さく弱いものに対して用いられる表現でしたから、生まれたばかりの赤ちゃんなどを保護したくなるような感情としてできあがったものと考えられます。人類は他の動物よりも相対的に大きな脳を持つことを選択した種なので、子がまだかなり未成熟な状態のまま産む必要があります。母親のおなかの中であまり育つてしまうと頭が大きくなりすぎて産めなくなってしまうからです。皆さんも、他の哺乳類の動物が生まれてすぐに立って歩き始めたり、自分から母親のもとへお乳を飲みに行く様子を映像で観たことがあると思います。それに比べると、人間の赤ちゃんは転がったままワアワア泣くばかりで、なんともか弱い存在です。そのまま放っておくと何も食べられずに餓死してしまうか、他の動物に食べられてしまいます。そのため、人類には子どもを積極的に保護したくなるような感情が必要になりました。②これが「可愛い」という感情の起源なのでしよう。

「くでしよう」と私も書いているように、これらの感覚・感情には「これで完璧！」と言えるような説明はまだありません。ほかに「面白い」は好奇心を広げた方が食物や道具の多様性につながり、ひいては生存確率の向上

につながったと考えることができますし、「楽しい」も共同体での集団活動を円滑に進めるために有益な感情としてできたのかもしれない。いずれも非常に高度な感情なので、③ 起源となる理由があつたとしても今ではすっかりその影は薄くなつていゝはずです。

さらに高度化した感覚・感情もあつて、そのひとつが「懐かしい」です。これはある特定の味や匂いが、過去に体験したある幸せな状況を思い出させることを指しています。A、ある神経刺激によつて生じた感覚が、過去の似た感覚へとなつて、脳内のデータベースから記憶を引っ張り出して追体験させるわけです。この神経刺激のなかには視覚による刺激も含まれています。昔の写真を見て懐かしさを覚えるケースなどがそれにあたります。大人になつてから故郷を訪れて、幼い頃に通つた小学校の前を通る時など、ほとんどの人が同じように心に抱く感情を「懐かしさ」と定義したわけです。

ただ、興味深いことに、人は一度も行つたことのない場所の写真を見て、懐かしさを覚えることがあります。私の大学の学生たちにさまざま写真を見せたところ、彼ら自身の故郷に近い景色だと感じた写真には、当然ながらほぼすべての学生が懐かしさを覚えます。B、まったく似ていないただの農村の風景だったり、はては明治時代の日本を写した古い白黒写真などでも少なからぬ学生が懐かしさを感じたと答えています。

この点に関して、「サヴァンナ仮説」という説がヒントを与えてくれるかもしれません。これは今から三十年ほど前に、一〇カ国で同時におこなわれた調査結果に基づいて提唱されたものです。ここでは、異なる人種や民族の間で、好まれる風景画のタイプに違いがあるかどうか調べられました。その結果、④ 人種や民族の違いにかかわらず、人は青色を基調とし、水や樹が描かれ、動物や人間も登場する風景画を好むという傾向が確かめられました。それがアフリカのサヴァンナの景色に似ていて、そこがまさに人類発祥の地と考えられていることから、「サヴァンナ仮説」が提唱されました。人はどこかで、自分たちのルーツとしての原風景を記憶しているというロマンティズムに、当時の人びとは大いに共感し、広く支持されました。今でも人気の高い考えですが、人類が誕生した土地がそもそもサヴァンナではないとする学説もあるため、今日では学問的にはさほど支持されていないようです。

絶対的な美はない。正円や黄金比を見せても特に脳内で快樂物質が分泌ぶんびつされることはない。——これが今のところの科学的事実ではあります。しかし一方で、多くの人が「美しい」と感じてきた作品があるのもまた歴史的事実です。言い換かえるなら、より多くの人が美しいと感じるようなメカニズムがなにかしら働いているようだ、ということがわかりました。このような美しさを、「普遍的な美」と呼んでおきましょう（普遍的とは、多くにあてはまること、時代を超こえて、常に変わらないことを指す言葉です）。

「サヴァンナ仮説」自体は、今日では科学的根拠こんきょに乏とほしいとみなされています。ただ、その仮説がうまれるもとなつた実験結果、つまり国や人種を超えて「水や樹、人や動物が描かれた、青色を基調とする風景」を多くの人が好んだことは事実です。そこから、そのような風景を一種の「普遍的に」人が好む風景とすることができでしょう。そして、すでに見てきたように、青色は人が生命感や安全性を感じられる色であり、水や樹は生存に不可欠な要素にほかなりません。さらには動物は、生命感を抱（注3）かせるモチーフであることに加え、食料源そのものです。つまり、そのような風景画に描かれたモチーフは、すべて人が好ましいと感じるようにプログラムされた（あるいは、そのように感じるようになった）要素ばかりなのです。そのため、私は人類発祥の地の原風景と結びつける「サヴァンナ仮説」を支持してはいませんが、「普遍的に人が好む風景」は、やはり人類が太古の昔から自然と好むようになった風景にほかならないと考えています。

訪れたこともない土地の田園風景を見て人が覚える「懐かしさ」についても、同じ説明が可能でしょう。もちろん、現代人は動物として本来的に人類が抱く感覚をベースにしてはいますが、そこに後天的な影響えいきやうをはるかに多大に受けています。それは知識として得たものや、家族や育かんきやうつた環境、学校や友人たちから受ける影響などさまざまです。そのため、人によってはビルが立ち並ぶ夜の都会の写真に懐かしさを覚える人もいるでしょうし、月面から撮影さつえいされた地球の写真を見て懐かしさと感じる人さえいるかもしれません。

⑤ 絶対的な美は無いのに、普遍的な美はある。——このことが、これまでの一連の考察から理解できたのではないのでしょうか。

人類はその誕生からほどなく、アートを創り始めました。それ以来、現代に至るまで、途切れることなく無数のアート作品が生みだされてきました。そこにかけられたエネルギーの総量は膨大なものです。繰り返して強調すべきは、アートは生存のためには直接的には役に立たないにもかかわらず、という点です。そのような一見「意味のないこと」を延々と積み重ねてきた動物は人類だけです。私たち人間は、それほどに不思議な生きものなのです。

(池上英洋『自分につながるアート』による)

(注1) 性選択——異性ととの繁殖はんしよくにおいて有利な行動や特性の進化のこと。筆者は本文より前の部分において、より色鮮あざやかやかな羽を持つ孔雀くくしやくのオスの方がメスに選ばれやすいため、そのような進化が起こったということ、性選択の例として挙げている。

(注2) 先に見たように——筆者は本文より前の部分において、人類にとって夜の闇やみは危険であるため明るい色を好むようになったのではないか、などと色や形に対して感じる美しさについて推察している。

(注3) モチーフ——芸術作品において表現の中心となる題材や思想。

問1 A、Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア たとえば イ したがって ウ しかし エ ところで オ つまり

問2

——線部①『美しい』の仲間の感情も同様です」とありますが、ここでの「同様」とはどのようなことを言っていますか。次の□にあてはまる最も適当な言葉を本文中から十五〜二十字で抜き出して、説明を完成させなさい。

本来、

十五〜二十字

感情だということ。

問3

——線部②「これが『可愛い』という感情の起源なのでしよう」とありますが、「これ」が指示する内容をまとめたものとして最も適当なものを次のア〜エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人類は大きな脳を持つことを選択したため、子どもを未成熟な状態のまま産むようになったということ。
- イ 人類は子どもを未成熟な状態のまま産むようになったため、大きな脳を持つことができたということ。
- ウ 人類は弱いものを保護したくなる感情が備わっていたため、未成熟な状態の子を産むようになったということ。
- エ 人類は未成熟な状態で子どもを産むため、弱いものを保護したくなるような感情が備わったということ。

問4

——線部③「起源となる理由があったとしても今ではすっかりその影は薄くなっている」とありますが、この傍線部③を「楽しい」という感情にあてはめて考えた場合、具体的にはどういうことになりますか。次の□にあてはまる言葉を四十字以内で答え、説明を完成させなさい。

現代では「楽しい」という感情について、

四十字以内

ということ。

問5

——線部④「人種や民族の違いにかかわらず、人は青色を基調とし、水や樹が描かれ、動物や人間も登場する風景画を好むという傾向が確かめられました」とありますが、ここでの「風景画」とはどのようなものだと筆者は考えていますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が自然と好感を抱く、生命のイメージが多く内在している作品。
- イ 長年の調査により解明した、美のメカニズムに基づいて作られた作品。
- ウ 人類の歴史が感じられる、人類が発祥した土地の原風景を描いた作品。
- エ 多くの国で芸術を象徴する色とされている、青色を基調とした作品。

問6

——線部⑤「絶対的な美は無いのに、普遍的な美はある」とありますが、これはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 特定の造形や構成方法により生み出され、全ての人が美しいと感じる美は存在しないが、同じ環境で育った人々が共有する感覚という意味での美は存在するということ。
- イ 全ての人が美しさを感じるように人間が計算して作り出せる美は存在しないが、文化や時代を超えて多くの人が好むモチーフという意味での美は存在するということ。
- ウ 特定の一作品にのみ備わった、全ての人が美しいと感じる美は存在しないが、様々な国の作者により共通して描かれてきた風景がもつ自然の美は存在するということ。
- エ 全ての人が美しいと感じることを科学的に証明できる美は存在しないが、作品に全ての力を注ぎこむ作者の生命力から生まれる時代を超えた美は存在するということ。

問7 筆者は「アート」をどのようなものだと考えていますか。六十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問8 本文の表現や内容に関する説明として**適当でないもの**を次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 類似する具体例を示すことで、本文の中心である「美しい」という感覚への考察をわかりやすく伝えている。
- イ 感情の起源を述べた部分では事実だと断定することを避け、あくまで推察であると示す言い方を用いている。
- ウ 筆者の考察にびったりと整合する学問的仮説を取り上げることにより、自分の主張の説得性を高めている。
- エ 最終段落で用いられている「」は、筆者の見方とは異なる世間一般的な見方であることを示す効果がある。